

Title	<翻訳>ダカニー・ウルドゥー物語詩『愛の花園』より：宴席の装飾，絵画と絨毯，音楽と舞踊
Author(s)	北田，信；Williams, Richard
Citation	言語文化研究. 49 p.173-p.179
Issue Date	2023-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90951
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【翻訳】 ダカニー・ウルドゥー物語詩『愛の花園』より
 宴席の装飾，絵画と絨毯，音楽と舞踊

北 田 信

Richard Williams

**Translation from Dakanī Urdu epic Gulšan-e-‘Išq
 Decoration of Banquet of Wedding, Paintings and Carpets,
 Musicians and Dancers**

KITADA Makoto

WILLIAMS Richard

Summary: The Gulšan-e-‘Išq (completed 1658 CE) is one of the representative works by Nuṣratī (died 1674 CE) who was the greatest poet in Dakani Urdu from Bijapur Kingdom. In this paper, the description of decoration of the place of banquet and the description of music and dance are translated with commentaries.

キーワード：デカン，ダカニー・ウルドゥー，ビージャープル

略号 D. = Dakanī H. = Hindi U. = Urdu P. = Persian A. = Arabic Skt. = Sanskrit

デリー城下町の話し言葉が起源であるとされるウルドゥー語は、まず南方デカンのムスリム諸王国で文学的に大発展を遂げた。この初期（西暦15世紀-17世紀末）のウルドゥー語を「ダカニー・ウルドゥー」つまり「デカンのウルドゥー語」と呼ぶ。18世紀に入ると北のムガルでも、ダカニー・ウルドゥー文学を手本として、遅ればせながらウルドゥー語による文学創作が盛んになる。このような経緯を見れば、ウルドゥー文学の歴史においてデカン期の作品群が占める位置は大きいと感じられるが、今のところ、この時期の作品群の研究や翻訳・紹介は手薄である。

本稿では、デカンのムスリム王国ビージャープルの宮廷詩人にしてダカニー・ウルドゥー語文学の集大成者と思える詩人ヌスラティー（Nuṣratī 没年1674 CE）の代表作、物語詩『愛の花園』（Maṣnavī Gulšan-e-‘Išq 著作年1658 CE）を取り上げる。『愛の花園』は、主人公の王子が夢の中で逢った遠い国の王女に恋し、長い冒険の末に再びめぐり逢い、結ばれる、という御伽話である。物語のあらすじはファンタジーであるが、具体的事物の細部にわたる耽美的な描写は、ヌスラティーが生きていた時代のビージャープル宮廷の華やかな生活や、その背景に

ある当時の美意識をかなり反映していると思われる。当時のビージャーブル王国では、イブラーヒーム・アーディル・シャー二世 (Ibrāhīm ‘Ādil Šāh II 1580-1627 CE) がインド・ペルシア両文化を融合して創出した新しい芸術文化様式¹⁾が、その孫アリー・アーディル・シャー二世 (‘Alī ‘Ādil Šāh II 1656-1672 CE) に受け継がれ、さらなる繁栄期を迎えていた。この美意識は『愛の花園』全編に流れているが、特に物語終盤のヒーローとヒロインが再会し結ばれる、宮廷における婚礼の祝宴を描いた箇所は、その絶頂に達している。筆者は既に、この箇所のうち「美食」「性交」の描写を翻訳紹介しているが〔北田2019〕、本稿では同箇所より、婚礼会場の飾付の様子および音楽舞踊を描写した箇所を訳出する。『愛の花園』の記述を見る限り、デカンの音楽は基本的にはインド古典音楽で、それをインド土着の楽器だけでなくペルシア伝来の楽器をも加えて合奏した。おそらく、インド音楽にペルシア音楽の様式も混ぜ込んだと想像されるが、記述の上からは演奏実践の詳しい模様は分からない。使用した版本は Abdulhaq 1902 である。

179頁

② あらゆる工芸の匠 (hunarmand) が、それぞれの精通する工芸に専念するよう招集された。

180頁

- ① 壇 (cautarā) が設置され、草原には絨毯が敷き広げられた。
四阿 (mandvā) が建てられ、木製の柵 (kaṭgarī) で囲いが作られた。
- ② 色とりどりの四阿は高く、そのアーチ門 (dehlīz) は天に優雅に聳える。
- ③ これらのアーチ門は真新しい弓のよう。美女たちの眉毛を嫉妬させる²⁾。
- ④ 中国の驚異的な絵師達は三界の諸相を描き出す。
- ⑤ 絵師達は金粉で絵を描き、新たに到来した春の図を出現させる。
- ⑥ 花の頬をした美女たちの森が、うち笑いつつ徘徊し、恋の集会にたむろう。
- ⑦ これらの絵画を前にして、人々は高き天を思い起こす。
これらの絵画のインクの黒さ (savād) は、土星 (zuḥal) を嫉妬させる³⁾。
- ⑧ 絵師達が絵具として使う白檀の色に比べると、木星 (muštarī) の色など取るに足りない。
緑の顔料の輝かしさは、満月 (sapūran) を凌駕する。
- ⑨ ルビー (mānik) の顔料から、火星 (mirrīx) は輝きと熱を受け取る。
絵の素晴らしさを見て、太陽は恥ずかしさのあまり溶け、液状の金 (āb-e-zar) となった。

1) Ibrāhīm ‘Ādil Šāh II の新しい芸術文化様式創生については、例えば Ahmad 1956 が詳しい。ただし、この研究書は、Ibrāhīm 王の著作とされるダカニー語歌詞集 Kitāb-e-Nauras を写本に基づいて原文テキストおよび英訳を行った、と銘打ったものであるが、残念ながら standard edition たる水準を満たしているとは到底言い難い。Kitāb-e-Nauras については、現在 Chicago 大学の研究者 Zoë W. High が校訂本・研究を作成しており、その完成を心待ちにしている。

2) 美女の眉毛はアーチ型をしている。

3) 土星は黒胆汁の分泌を増大させ、憂鬱 (saudā) を誘発すると信じられていた。

- ⑩ 美しい白い顔料は、金星 (zahrā) の顔に泥を塗った⁴⁾。
ラピス・ラズリ (lājvard) の顔料は、水星 (‘utārid) をこっぴどく打ち負かした。
- ⑪ 絵師達は、なんと繊細なアイデアを持っていることか！
絵師達の絵は、水面に映し出された似姿のようだ。
- ⑫ 彼らの絵筆が、人物画に頬紅 (gāzah-e-mū) を入れるとき、
それらの人物にはイエスの生命の息吹が吹き込まれる⁵⁾。
- ⑬ これらの絵筆で描き出された人物像は、まさに立ち上がり、お互いに話をするかのようだ。
- ⑭ これらの摩訶不思議な絵図が描き出されると、これらのまばゆい色彩は人々の心を魅了した。

〈絨毯の描写〉

- ⑮ それが済むと、大勢の職人が主要な部屋の内装に取り掛かり、絨毯を敷き詰めて花園のようにした。
- ⑯ 主要な部屋には、朝焼けのように赤い色のティヴァースイー⁶⁾が敷き広げられ、壁には寶石が嵌め込まれ、天空を打ち負かした。
- ⑰ 職人達は、あちこちに置かれた家具 (qamās) に革を張って覆い⁷⁾、クッション (lōr bālišṭ)⁸⁾、枕 (takiyah)、ラグ (namad)⁹⁾が置かれた。

181頁

- ① 天を覆うほどの巨大な天蓋 (āsmān-gīrī) にはたくさんの房飾り (jhalam) が付いており、その光線 (kiran) が眩しすぎて、太陽の面目を失わせた¹⁰⁾。
- ② 天上から釣り下がる幾つもの球型香炉 (‘ūd-sōz) の見事な透かし彫り (jhajar) を見て、天球 (gagan) は度肝を抜かれた¹¹⁾。
- ③ かぐわしくまばゆき樟脳 (kāfūr) 製のロウソクに圧倒されて、今まで不動だった北極星 (qutb) さえ動揺した¹²⁾。

4) 字義どおりには「土ほこり (gard) を投げつけた」。

5) 「イエスの息吹」は死者を蘇生させる。

6) P. tivāsī “a kind of carpet, or embroidered rug” [Steingass]. 様々な色の刺繍がほどこされ、朝焼けのようなグラデュエーションが由来している。

7) おそらく、家具の上面の平らな部分に革を張り、ソファのように座れるようにしたのだろう。

8) U. gāo-takiyah と同じもので、クッションの細長く円筒形になったもの。背もたれとする。

9) P. namad フェルト等の粗めの繊維で作られた敷物。ラグ (rug)。

10) 金糸の房飾りで縁取られているのが、日輪がたくさんの光線を放射しているのに似ている。

11) 球形の香炉には、透かし彫りが施され、たくさんの目から、香木を燃やす煙が立ち上っている。おそらくその形が、経線・緯線が縦横に伸び、さまざまな星座の図像や天体が刻まれた天球儀に似ている、というのだろう。あるいは、天井からたくさんの球形香炉が釣り下がっている様が、天空に浮かぶ沢山の天体を思わせる。

12) 北極星の冷たい輝きを樟脳の香りと白さに対置した表現。

- ④ 無数の輿 (muḥāfah) が列をなして進み、幾すじもの銀河のように流れる。
どの輿からも棹が伸び、ランタン (qandīlah < candela) が、昴星 (ṣuraiyā) よりも高く掲げられている。
- ⑤ たいまつと“三日月” (hilāl)¹³⁾が、夜 (rayan) を照らし出す太陽の代用品 (ne‘m al-badal)¹⁴⁾となる。
- ⑥ アーチ形の壁龕 (tāq) は、美女の眉毛のよう。
そこに置かれたワイン (mad) のガラス瓶 (šīšah) は、美女たちのうるんだ瞳 (nayan)。
- ⑦ 庭園の四方に配置された噴水装置 (kal) が、水 (nīr) を吹き出し、花々の色を新鮮に保つ。
- ⑧ 水路には、麝香 (zavād < A. zabād) と混合香 (cauvā)¹⁵⁾が混ぜられている。
水路の底には、琥珀 (ambar) の砂利が敷き詰められている¹⁶⁾。
- ⑨ 緑野には美しい花々が一面に広がり、土壌には琥珀 (rāndhā)¹⁷⁾が育つ。
- ⑩ 地面を色付けするために撒かれる石灰粉 (cūnā) の代わりに、月光が地面をましろに覆い、赤土 (lāl māṭī) の代わりに、赤い夕焼けが地面を赤く染め上げた。
- ⑪ 会場の設営が完了した時、賓客が招き入れられ、何段にもなった席に着いた。
- ⑫ 大勢の客たちの、喜びできらめく顔を見て、恥ずかしくて星々は輝きを失った。
- ⑬ 客たちをお待たせせず、香りよく色美しいウエルカム・ドリンク (‘amal pān) がふるまわれた。
- ⑭ お客達の目はうるおいに満ち輝いた。酒杯は太陽よりもまぶしく煌めいた。
- ⑮ さわやかな清涼飲料をいただいて、客人達はリフレッシュし、心に秘めた恋と情熱を取り戻した。
- ⑯ 楽人 (muṭrib) は甘い旋律 (tān)¹⁸⁾を奏で始め、心にときめきを与える。
音楽のエキスパート (gyānī) は、知 (gyān) と徳 (gun) にそぐう曲を合奏し、歌う¹⁹⁾。
- ⑰ 美しい音響 (sabad) はいや増しに高まり、花びらのような唇をした美女たちは、帳を開けて、楽人たちを見つめた。
- ⑱ あだっばい女達は巧みに (catur), しなを作って、幾千もの幻術 (chand) で客人達をもてなし、虜にした。

13) ランプの一種らしい。

14) A. ne‘m al-badalとは、より良い代用品 [Steingass]。太陽よりも便利な代用品。

15) H. *cauvā* (lit. “an aggregate of four”) “an unguent or fragrant paste of four ingredients, viz. sandal, agallochum, saffron, and musk; or ambergris, saffron, musk and the juice of the flowers of the *Arbor tristis* (i.e. *pārijāta*). [Platts]

16) あるいは、琥珀には樹脂系香料としての用途があるので、水に混ぜられている、という解釈もできる。

17) D. *rāndhā* は、特別な琥珀の一種。

18) 厳密にいうと、音楽用語 *tān* “拡張したもの”とは、ラーガ(旋法)の構造規則を守って作られたヴァリエーションのことをいう。

19) エキスパート (gyānī) とは、インド古典音楽の理論 (saṅgīta-sāstra) に熟達したグルをさす。知と徳とは、具体的には音楽論書に定められた旋法や拍節についての規則のことをいう。

- ①⑨ 見下ろすと“蓮”の女 (padmanī) 達がいる。あちらには妖精族の王女 (śah-parī) 達が空中を飛んでいる²⁰⁾。
- ②⑩ 糸杉 (sarv) のようにすらりとした背丈の女性が並び、糸杉の林のようだ。だが不思議なるかな！これらの糸杉には、果実がなっているのだ²¹⁾！
- ③⑪ 不思議なるかな！これらの糸杉は、うきうきとスキップするのだ！これらの糸杉は、青春 (jauban) の果実の重さに、しなるのだ²²⁾。

182頁

- ① 女達の唇は、魔法の水ギセル (huqqah) の吸い口。情欲をそそる。女達の声 (sabad) は、理性 (budh) を失わせる呪文。
- ② 繰り広げられる色艶 (chab) のひとつひとつに、幾千の雅が込められている。繰り広げられる幻術 (fann) のひとつひとつに、幾千ものまやかしが隠されている。
- ③ 女達は男たちの意識を縛り上げて (cain band) 雁字搦めにし、思わせぶりの草草 (arat bhāo)²³⁾をいろいろしながら、色艶 (chab) の魔術 (chand) を披露する。
- ④ スルマンダル²⁴⁾(琴) をかき鳴らしながら、両面太鼓 (pakhāvaj) を打ち鳴らしながら、歌手 (gavaiyā) が立ち上がり、リズム (tāl) を取りつつ歌いだす²⁵⁾。
- ⑤ あらゆる美德 (gun) を具えた踊り子が踊り始めた。妖精 (parī) のように宙を舞うようだった。
- ⑥ 彼女の、甘美なる舞踊学についての知識 (gyān) は、音楽 (rāg), 色艶 (rang), 情緒 (ras) で溢れていた²⁶⁾。それを見て、月は恥ずかしさのあまり正気 (sudh) を保てず、そそくさと退散した²⁷⁾。

20) Skt. padminī「蓮の女」。古代インドの性愛経典 (kāmasūtra) において、美貌・徳質において最も優れる、最高のランクの女性をこう呼ぶ。一方、妖精 (P. parī) はペルシア文学で、美女の代表格である。

21) たわわなる乳房を果実に喩えた。

22) 女性のすらりとした姿を糸杉に喩えるのは、ペルシア古典詩を踏襲するが、乳房を丸い果実 (ピンパ果) に喩えたり、その重みで猫背になる、といったりするの、インド古典詩の常套表現である。

23) Skt. artha bhāva 文字通りには「意味と情感」。もともとインド古典演劇学や詩学において、詩の言葉の意味や、音楽や舞踊が喚起する情感をさす用語であるが、この文脈では、舞踊の表現 (ジェスチャー) を指す。つまり、インド舞踊において踊り子がさまざまなジェスチャー (mudrā/abhinaya 印契) を結んで観客の心に、意味を印象付けたり伝達したりすることを言っているのであろう。

24) D. surmaṅḍal < Skt. svara-maṅḍal 字義どおりには「楽音の曼荼羅」。西洋のダルシマーやペルシアのサントゥールに似た、木製の箱に多数の弦を張った楽器で、今日の北インド古典音楽でも用いられる。現代の奏法は、歌手が開放弦で掻き鳴らすのみで、主旋律を奏するものではないが、ムガル時代の細密画を見ると、丸いピックで弦を押さえ、スライド奏法で旋律を演奏していたようである。

25) 直訳すると「ターラを保って、アーラーブ (ālāp) をなす」。Skt. ālāpa「おしゃべり」は、現代の北インド古典音楽の用語としては、演奏の始めに打楽器の伴奏なしで、ラーガ (旋法) の音階構造や特徴的の節回しを無拍節の状態でゆっくりと歌唱・演奏する部分を指す。しかし、この箇所では「ターラ (拍節サイクル) を保って」とあるから、今日とは若干、様子が違うようだ。

26) 踊り子の披露する技芸には、インド古典音楽のラーガ (旋法) や古典美学の美的情感 (rasa) についての正確な知識に裏打ちされていた、ということも含意する。

27) 月が満ち欠けする、その一日分の幅を Skt. kalā と呼ぶ。半月 (16日) の周期で満ち欠けするので、月は、しばしば「[16の] kalā を持つ者」と呼ばれる。一方、Skt. kalā には「技芸」という意味もあり、舞踊家・音楽家などの芸術家も「kalā」

- ⑦ 踊り子の旋回の優美さを見て、天輪²⁸⁾は呆然とし、歩むことを忘れた。
太陽は滝のような雨となって消散した²⁹⁾。
- ⑧ [踊り子の素早さに打ちのめされて] 風 (pavan) の駿馬 (turang) たちも消耗し、足が萎えた。
鋭い炎という剣の光沢も、鈍くなった。
- ⑨ 鳳凰 (humā) は美しい音響 (sabad) を聞いて魅了され (lubd), 巨大な翼を羽ばたいて、中空から大地 (bhuīn) へと引き寄せられた。
- ⑩ 足首に鈴をつけた踊り子たちは宙に舞い上がり、妖精たちの群れに衝突した。
- ⑪ そこで、天上の妖精たちは、あつという間に、ものすごい勢いで水面に落ちてきた。
- ⑫ 踊り子たちは、春の季節 (rut) たけなわの熱に浮かされて、飛び回り、月という演壇に足を載せて舞った。
- ⑬ 時にゆっくりと、時に素早く、肢体を色っぽくくねらせながら、恥じらっている様がさらに魅力を増大させる。
- ⑭ 女達の美声に、迦陵頻伽 (qaqnūs)³⁰⁾は嫉妬に燃えた。
女達の踊りの上手さに、孔雀は悔しくて泣いた。
- ⑮ カワセミ (kauriyāl) は、彼女たちの跳躍を見て親しみを覚え、
水の中を自由に泳ぎ回る魚は、彼女たちの仲良し。
- ⑯ 踊り子たちと楽人たちは、見世物 (tamāśā) によって、鑑識眼をそなえた (gyānī)³¹⁾客人達の心を奪い、優美な動きで観客を忘我の境地に連れて行った。
- ⑰ 彼女たちの月のような顔を凝視しながら、観客は魅了され、その目はチャコーラ鳥 (cakōr)³²⁾のようにパチパチと瞬いた。
- ⑱ 居並ぶ客人達の目の前で、素晴らしい踊りの数々を披露して、ひとりひとりの心を虜にした。
- ⑲ 踊り子の長い巻き毛が、客人達の顔に垂れ掛かると、踊り子たちは、近づいて、彼らを巻き毛という投げ縄で捕獲した。
- ⑳ 客人達は見世物には飽きる事がなかったが、今度は大御馳走でもてなされることになるのだ³³⁾。

を持つ者」と呼ばれる。この詩節には kalā は用いられていないけれども、おそらくこのような連想が働いているのだと思われる。

28) ペルシア古典詩では、天空は回転する円環である。

29) 直訳すると「[天は] 太陽の滝の流れる水となった」。意味不明である。

30) A. qaqnūs は架空の鳥で、鳳凰の一種。戯れに「迦陵頻伽」と意訳してみた。ただし、「嫉妬に焼ける」とあるから、「不死鳥(火の鳥)」とする方が、原文の文脈には良いかもしれない。

31) つまり、インド古典美学にいうところの「粹人・心ある人」(sahṛdaya)。

32) H. cakōr 「キジ科アジアイワシャコ Alecoris chukar」[古賀 & 高橋 2006]。インド古典詩において、チャコーラ鳥は月の恋人、とされる。

33) この続きは、北田2019に訳出されている。

文献表

『愛の花園』校訂本

Abdulhaq (= 'Abdu-l-ḥaqq) (ed.) 1902: *Maṣnavī Gulšan-e- 'Iṣq. Mullā Nuṣratī Malik al-Šu'arā-e- 'Ādil Šāhīyah Bījāpūr, taṣnīf-e-sanah 1068 Hijrī. Murattabah-e-'Abdu-l-ḥaqq. Anjuman-e-Taraqqī-e-Urdū, Karāčī, 1902 'Iṣvī.*

Ahmad, Nazir 1956: *Kitab-i-Nauras by Ibrahim Adil Shah II. Introduction, Notes & Textual Editing.* Bharatiya Kala Kendra, New Delhi.

北田信 2019「デカンの美食と聖婚ダカニー・ウルドゥー語の詩人ヌスラティーン」『イスラーム世界研究』Vol. 12 京都大学 2019, pp. 222-251 (京大リポジトリ KURENAIにてオンライン公開有 <<http://hdl.handle.net/2433/240738>>)

古賀勝郎 & 高橋明 2006『ヒンディー語 = 日本語辞典』大修館

Platts, John T. 2004: *A Dictionary of Urdu, Classical Hindi and English.* Munshiram Manoharlal, New Delhi.

Steingass, F. 1996: *A Comprehensive Persian-English Dictionary.* Munshiram Manoharlal, New Delhi.

